

【学会報告】

障害児・者といっしょに生きる
～JOCS が障害児・者になぜ関わってきたのか・関わるのか?～

日本キリスト教海外医療協力会 (JOCS) 常任理事 大友 宣

要旨

公益社団法人日本キリスト教海外医療協力会は「イエス・キリストの教えに従い、困難の中にある人々の健康といのちをまもり、人々と苦悩・喜びを分かち合う」を使命としている。また、「すべての人々の健康といのちがまもられる世界」を目指し活動している。医療従事者（ワーカー）派遣、奨学金支援、協働プロジェクトの3つの活動を柱としている。JOCSの歴史は1938年に行われたクリスチャン医師、看護師、医学生らによる中国大陸での医療活動にさかのぼる。戦後1949年日本キリスト者医科連盟が組織化され、アジアからの研修生の招聘と医療従者の派遣を行うため1960年日本キリスト教海外医療協力会が設立された。インドネシア、ネパールなどアジア、アフリカ諸国へ医療従事者を派遣した。その中で、岩村昇氏は重い病気のおばあさんをひとりの貧しいネパール人の青年が、山や谷を越え、3日間も歩いて運んでくれ、お礼にとお金を差し出したところ、青年は受け取らず、ネパール語で「みんなで生きるため」と答えて立ち去ったという話を日本に紹介した。

JOCSは10年に一度、会の方向性を話し合うJOCS海外医療協力者会議を開催し、方向性を確認し若い世代への継承を行ってきた。JOCSの障害者・児への関わりとしては、ハンセン病医療活動、聴覚障害者への働きかけ、母子保健活動などが始まりであったが、近年ではバングラデシュでの障害者へのはたらき、知的障害者へのはたらきなどが挙げられる。JOCS会長の畑野研太郎氏はJOCSの特徴とはたしてきたミッションとして、「思想的先見性」「実践的先導性」「日本のキリスト教界の中での役割」「特徴ある組織」「たくさんの子どもを産んできた組織」の5つを指摘した。卓越した企業や組織を考えると、まずWHY（なぜ）が明確である。その後HOW（どのようにして）やWHAT（何をするか）を考え表現する。JOCSは前史から始まり現在に至るまでさまざまなものがたりが紡がれている。そのものがたりのエキスを凝集したものがJOCSのWHYとなっている。科学的でエビデンスのあるHOWやWHATは重要ではあるが、原動力となるものはWHYである。